

日米兵士の慰霊続ける

伝えたい記憶

戦後76年

田

1945年に中津市上空であつた空中戦で亡くなった日米両国の兵士を弔う平和公園が市内の八面山にある。70年から慰霊の集いが開かれ、米

国の遺族も参列して祈りをささげてきた。搭乗員の遺族の思いや両国の交流は英語の本で紹介され、日本語版も出版された。地元の関係者は「肉親を失う悲しさは日本も米国も変わらない。今後も慰霊を続けたい」と語る。

場を訪れた搭乗員の息子は日米の国旗が描かれた「名誉の碑」の前で静かに涙を流した。

案内した「平和公園愛好会」事務局長の楠木正一さん(70)(中津市)は「遺族の来訪は初めて。家族愛の強さに感動した」と振り返る。

B29墜落の 米国人が本に

中津・八面山

は「名誉の碑」も建てられた。

米国の元空軍整備士、マイク・バーグさんは2012年、遺族への取材や軍の記録を元に著書「B-29『エンパイア・エクスプレス』の搭乗員と日本の静寂な山の中にある平和」をまとめた。

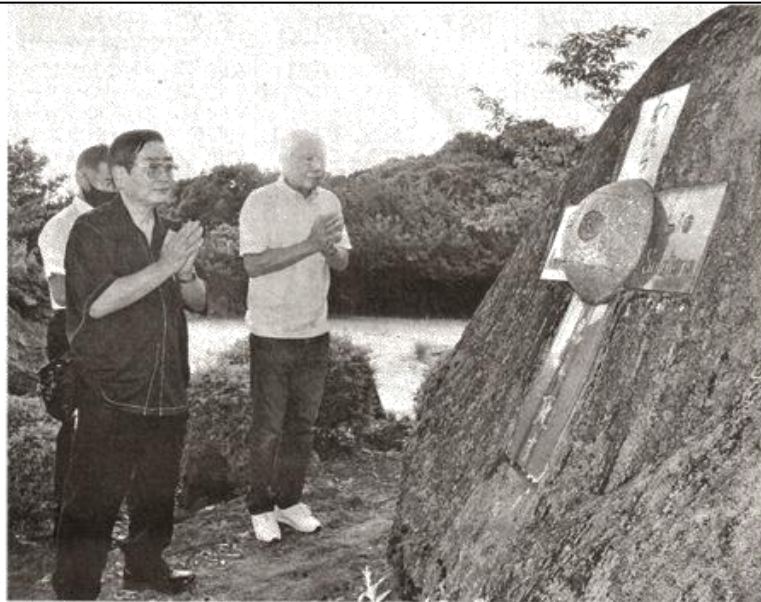
友人の兄が搭乗員の一人だったことから関心を持った。中津市を取材で訪れた際の地元での交流などを書き加え、20年に第2版を出版した。

搭乗員の一人一人の経歴や戦地から家族に送った手紙、帰りを待つ家族の書簡、市内での慰霊の取り組みを書き記した。取材に協力した川寫整形外科病院(中津市)の川寫真人理事長(77)は「搭乗員の多くは10、20歳代の若者だった。正義の戦争はないと知ってもらいたい」と話す。

平和公園にはB29の搭乗員11人の写真や日米の機体の破片を展示する記念館がある。かつては「平和祭」の名称で慰霊してきたが、公園愛好会の会員の高齢化で数年前から規模を縮小し、今年の参列者は約30人だった。

航空戦史研究者、深尾裕之さん(50)(国東市)らは「記録を残さなければ、なかったことになってしまう」と6月に本を日本語に訳し、県と中津市の図書館に寄贈した。福岡の西部軍司令部で米軍捕虜の処刑に関わった軍人の三男、冬至克也さん(67)(福岡市)が資金を援助した。

楠木さんは「日本兵も米兵も国のために亡くなった。お互いを思いやる気持ちで戦争のない世の中につなげてほしい」と話す。(関屋洋平)



名誉の碑に手を合わせる楠木さん(右端)と川寫さん(右から2人目)ら



マイク・バーグさんの著作の日本語版

「命を落としたり人に敵も味方もない」。楠木さんの父、正義さん(2004年に83歳で死去)らは70年に慰霊碑を建立。76年に一帯を平和公園として整備した。墜落現場に

県内では竹田、佐伯市でもB29が墜落した。

竹田市では1945年5月5日、日本軍の戦闘機「紫電改」との戦闘で墜落。米側の搭乗員7人が生き残ったが、機長を除く6人は米軍捕虜への実験手術が行われた「九大生体解剖事件」の犠牲になったとみられる。

墜落現場には日米の兵士を慰霊する「殉空之碑」があり、毎年5月に

竹田や佐伯でも

追悼法要が営まれる。

深尾さんによると、佐伯市では45年5月7日、大分海軍航空基地を爆撃するため出撃し、日本軍の戦闘機の攻撃で墜落。搭乗員11人のうち10人が死亡した。1人は西部軍司令部に送られ、処刑されたとみられる。昨年5月には遺骨が一時、安置されていた臼杵市の寺で慰霊祭があり、米国の遺族がメッセージを寄せた。